

国宝

協力: Universum 映画館

監督 李相日
脚本 奥寺佐渡子
撮影 ソフィアン・エル・ファニ
＜原作 吉田修一「国宝」＞

出演	吉沢亮 / 黒川想矢 立花喜久雄 (花井東一郎)	横浜流星 / 越山敬達 大垣俊介 (花井半弥)	高畑充希 福田春江
	寺島しのぶ 大垣幸子	渡辺謙 花井半二郎(白虎)	森七菜 彰子
	見上愛 藤駒	4代目中村鴈治郎 吾妻千五郎/歌舞伎指導	田中泯 小野川万菊

国宝とは？

日本では芸術作品や貴重な建築物が「国宝」として認定されるが、特別な芸の継承者である人をも、「人間国宝」として認定する制度がある。この映画では喜久雄が国宝・万菊を目にし、歌舞伎に魅了され、自らも国宝になるべく芸に全てを捧げた50年の人生が描かれる。

歌舞伎の成立と「女形」の登場

17世紀初頭、日本は長い戦乱が終わり、徳川家康による江戸時代が始まる。当時流行した、奇抜な格好で変なことをする「傾(かぶ)き者」(常識から逸脱した者)の装いや仕草を取り入れた、「阿国(おくに)」と名乗る男装女性の芸に、人々は熱狂する。多くの女性芸人がこれを真似て座を組み、また当時新しく登場した楽器、三味線も取り入れ、各地を巡業し「女歌舞伎」として大流行する。あまりの人気はやがて、誰を応援するかなどで、客同士の諍いの原因となり、幕府は「女性が舞台上立つと、風紀が乱れる」として、女歌舞伎を禁じた。その後、演劇的要素が強まった、成人男性だけが演じる舞台芸能として、本日「歌舞伎」として知られる舞台芸術が確立されていった。ここに、男性が女性を演じる「女形」が登場する。

圧倒的なりアリティーを可能にした背景

原作者吉田は、中村鴈治郎一門に3年間密着。黒子としての衣装を作ってもらい、どこでも自由に目立つことなく入り込み、様々な角度から歌舞伎を取材した。主演の吉沢亮と横浜流星は、歩き方や扇子の置き方など、日本舞踊の基本から一年半の稽古を積んだ。当初は個別の稽古だったが、やがて二人揃って女形として練習する中、横浜は吉沢の女形に「色っぽさ」を感じたため、自分は「可憐さ」で行こうと決めた。この映画が高い評価を得ているのは、彼らが身につけた芸を披露しているのではなく、その芸で演じる舞台の上で、それぞれの感情や背景が表現されている点。映画の中で、舞台のシーンはカットされているが、前後の文脈を理解するため、役者たちは全ての踊りを通して覚えてカメラの前で、観客としてのエキストラが実際に見守る中、演技している。また本物と見まごうほどのリアルな歌舞伎座のセットを作り、これまで誰も見たことのないアングルからの撮影が実現した。主要キャストに本物の歌舞伎役者はいないが、一つだけ言及しておきたいのが、寺島しのぶの存在。彼女は歌舞伎の名門、音羽屋の第一子として生まれた。「いつか、自分も歌舞伎役者として舞台上立つんだ」と自然に思っていた

が、「女の子は歌舞伎の舞台上に立てない、歌舞伎役者を継げない」という事実突き当たる。そして歌舞伎外の世界で、一流の役者となった。(2010年にはベルリン国際映画祭で銀熊賞受賞)。現在は、歌舞伎の舞台にも立ち、また歌舞伎役者デビューを果たした息子を支える身でもある。血はあるのに芸を継げなかった寺島が「血筋である息子に、なぜ継がせない！」と迫る役を演じるのは、注目に値する。

映画に登場する歌舞伎の演目

「積恋雪関扉」(映画「残菊物語」の影響)

無口な関所の番人関兵衛は裏では謀反を目論む悪党、遊女墨染は実は桜の精。衣装の早替わりで隠れた正体が現れる「ぶつ返り」という手法が用いられる。墨染を演じる喜久雄の才能を半二郎が見出す。

「連獅子」

ライオンは自身の子を谷に突き落とすという伝承を元に、親の厳しさと愛、子の成長を描く作品。現在でも、実の父と息子が演じることが多く、中でも重いカツラをつけて、毛を振り回す「毛振り」は、芸の伝承を象徴する場面として有名。喜久雄は半二郎と俊介が演じる連獅子を目にして、歌舞伎の魅力に初めて触れる。

「鷺娘」

恋に悩み苦しむ一人の娘。やがて、この娘が実は鷺の精であることが分かる。恋の喜び、叶わない許されざる恋の切なさ、怒りや嫉妬、さまざまな感情が、衣装が一瞬で変わる「引き抜き」という手法で表現される。最後は、あまりの執着に成仏ができなくなり、地獄の責めを受けて苦しみながら死に絶える。喜久雄と俊介は人間国宝である万菊が舞う「鷺娘」を見て、衝撃を受ける。

「二人藤娘」

藤の精が女性となって恋心や切ない女心を踊りで表現する。土産物として好まれた大津絵から人物が抜け出して踊る、という設定。二人で演じるヴァージョンは2016年が初演で、二人ならではの「揃い」や「掛け合い」が強調されている。喜久雄と俊介が「東半コンビ」として輝く様子が描かれる。

「二人道成寺」

和歌山県にある道成寺に伝わる伝説。清姫が僧侶安珍に一目惚れするが、安珍にはその気がなく、約束を反故にして逃げてしまう。清姫に追われた安珍は鐘の中に身を潜めるが、怒りと執着から大蛇になった清姫に焼き殺され、清姫も入水自殺する。以来、この寺には鐘がない。数百年後、この寺に新たな鐘が。とそこへ女が現れて、鐘を見たい、踊りを捧げたいと申し出る。この女が実は、清姫の怨霊であることが明らかになる。女は再び蛇になり、鐘に執着する。蛇になってしまうほどの恋心、喜び、情念、嫉妬や恨みなど、激しい感情の起伏が踊りで表現される。姉妹として二人で踊ることで、多面的だったり相反する感情や思いがバラレルに表現される。喜久雄と俊介のライバル意識、芸風の違いが演目の中で表現される。

「曾根崎心中」

1703年大阪で実際にあった心中事件をもとに近松門左衛門が人形浄瑠璃の脚本として書き下ろし、大成功を取め、歌舞伎でも演じられるようになる。遊女お初と番頭の徳兵衛の恋は、友人の裏切りや社会のしがらみによって引き裂かれ、「想いはあの世で成就させよう」と心中する。心中が流行ってしまったため、1723年に上演が禁止された後、1953年に復活、今でも繰り返して上演される名作。映画の中では「血筋か才能か」というテーマが立ち上がるきっかけの演目。

その後、「二人道成寺」、「曾根崎心中」、「鷺娘」が繰り返して登場する。